

双葉町高齢者等福祉部会 講話

(一財)電源地域振興センター
客員研究員 中村元則

ビデオを見て感じたこと

- 高齢者同士が支え合いながら、積極的に地域に関わり、それが“生きがい”にもなっている姿
- 高齢者自身が“リーダーを担っている”こと
- “支える側”も“支えられる側”も無理をしない
- “支える側”より“支えられる側”の方が多い
- 行政主導から住民主体へ、発想の転換が必要ではないかな・・・と感じました。

かつては双葉町にも

町の目指したい将来像

『みんなが主役！
いきいきワクワク双葉町』

(趣旨)
まちづくりは、『みんなが主役』となり、当事者意識をもって取り組むことが大事です。また、みんなが『いきいきワクワク』と楽しんで取り組めば、『“ひと”も“まち”も輝やく』という趣旨が表現されています。

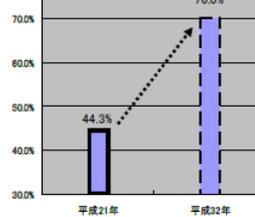
町の目指したい基本指標

指標① 人口・世帯数

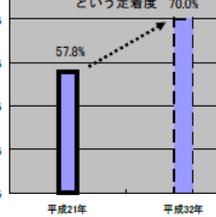


国の推計値を厳しく受け止めつつ、目標人口をH27年6,500人、H32年6,300人と設定しました。

指標② 町への愛着度



指標③ 住み続けたいという定着度



町では、住民参加と職員参加のもとで、平成二十三年度からスタートする総合計画を策定し、昨年十二月の町議会にて承認されました。今回は、その新総合計画の骨子を報告します。

愛する双葉町の十年後を目指して 新総合計画を策定 「第四次総合計画」概要報告

基本目標1 協働で自立するまち

- 住みよいまちづくりに向けて住民等と行政が協働しあうまち
- 行政が健全に運営されているまち
- 住民に満足される行政サービスが行われているまち

- ①住民等と行政の協働意識を醸成・普及する ②住民が必要とする情報を提供する ③住民が自発的に活動しやすい環境をつくる
- ①健全な財政運営を推進する ②事業の見直しや評価システムの確立を図る ③地域力の活用や広域連携を推進する
- ①住民が利用しやすい窓口環境をつくる ②職員のスキルアップを図る ③住民から頼られる役割をつくる

基本目標2 夢を持って働けるまち

- ふたばを愛する人々が、夢を持って働ける場があるまち
- 農業で楽しい生活を築くことができ、後継者に恵まれているまち
- 町の特色を生かした産業があり、地場産品が流通しているまち
- 町の観光資源が活かされ、来訪者でにぎわうまち

- ①原子力との共生を推進する ②商工業の振興と新たな産業の創出を図る ③若者が働きやすくチャレンジしやすい環境をつくる
- ① 農業生産基盤と生産組織の強化を図る ②特産品(ブランド)の開発に向けて造品・造材の発掘を推進する ③農産物の安全・安心化を図る
- ①町の特色を活かした産業を振興する ②地「産・販・消・食」を推進する ③地域外消費者への販売環境を整備する
- ①町の魅力を守り活用する ②町の良さを子どもや若者に知ってもらい ③町の魅力を発信する

基本目標3 いきいきと学び続けるまち

- あらゆる分野から求められる人材を育てるまち
- 生涯を通して学び続けるまち
- 楽しく健康づくりができ、安心して医療を受けられるまち

- ① 幼児教育を充実する ②「生きる力」をはぐくむ ③「共に生きる力」をはぐくむ ④学び続ける教育環境を充実する ⑤町民参加の教育を推進する ⑥安全安心な教育環境を充実する
- ①生涯学習を充実する ②文化及びスポーツ・レクリエーションの環境を充実する
- ①健康づくりの意識高揚を図る ②保健・医療体制の充実を図る ③経済的負担の軽減を図る

基本目標4 健康で明るく暮らせるまち

- 総合的なサポートが得られ、安心して子育てができるまち
- 高齢者や障がい者(児)がいきいきと暮らせるまち

- ①育児不安の解消を図る ②安心して子育てのできる環境を整備する ③子育てに対する負担を軽減する
- ①高齢者・障がい者(児)が生活しやすい環境をつくる ②高齢者福祉サービス・介護予防の普及を図る ③障がい者(児)の自立と社会参加の促進を図る

基本目標5 各世代がともに笑顔で生活できるまち

- 各世代がともに住み続けたいと思える定住環境の充実しているまち
- 人々が笑顔で交流し、安全に暮らせるまち
- 環境に配慮し、豊かな自然と共生するまち

- ①総合的な土地利用を推進する ②定住環境を充実する ③安全で安心できる生活に密着した交通体系を充実する
- ①災害に強いまちづくりを推進する ②火災・防災・交通などに対する体制の充実を図る ③各世代が元気に暮らせるコミュニティを創造する
- ①ごみの排出やリサイクルに配慮したまちをつくる ②地域の環境に配慮したまちをつくる ③自然を活かしたレクリエーション環境を創造する



新総合計画は、これまで「町勢振興計画」と呼ばれていましたが、もう一度まちづくりの原点に帰り、自分たちの住む町を総合的に見直そうという観点から名称を「総合計画」と変更しました。

みんなで目指す協働のまちづくり

町の目指したい将来像の実現のために、次の3つの視点に基づいて施策を展開していきます。
① “自立と協働”の精神で ② “住民力”を一つにして ③ “ふたばの良さ”を全国に発信しよう!!



みんなでやっぺ!!
ダルマンパワーのまちづくり

役場はやります!! (推進に向けて)

目指したい町の将来像や戦略テーマの実現に向けて、双葉町役場は、以下の視点から、より一層の改革を推進し、施策の実現を図ります。
① “自主、自立・自律主義”の精神で ② “共有・共画・協働”において、調整役を担います ③ “経営資源”を有効に活用します

双葉町の将来の姿

総合計画の体系(基本目標・戦略テーマ・施策方針)

実現に向けて

かつて、ふるさとでは・・・

■ すでに双葉町内でも、様々な取り組みが開始されています。幾つか例をあげると・・・

- 子ども見守り隊の活動
- 特産品の開発・販売についてのグループ活動
- 各家庭でのごみの減量化（食べ残し削減）運動
- 自主防災組織の立ち上げ
- 花いっぱい運動
- 総合型地域スポーツクラブの活動
- 道路等の小動物の死骸処理
- 地域の身近な道路の除草
- 生活道路の除雪
- 町道・農道・林道の路面洗掘等の簡易補修
- 道路・河川・海岸清掃など

おらが双葉町を
誇りをもって次世代
に渡せるように、
みんなでやっぺ！！



双葉町内で
すでに行われている
協働の取り組みを
紹介します



花いっぱい運動

昭和 57 年に双葉町花いっぱい運動推進会が発足し、延べ 46 団体が参加しています。



南・北小学校子ども見守り隊

児童の登下校時に、バス停留所や踏み切り、交差点などに立ち、児童の安全を見守っています。





ボランティア清掃

有志団体によりごみ拾いなどを実施しています。年間10団体、延べ人数約600名の方が参加しています。

特産品の展示販売

商工会、農業者団体、婦人団体、生産者団体、民間人などが協働して、双葉の地場産業を利用した特産品を開発し、展示販売を行っています。



クリーンアップ作戦(町内全域)

7月上旬、町内行政区ごとに道路や河川の草刈りやごみ拾いを実施しています。

表 2 - 1 双葉町住民意向実態調査の概要

項目	概要
調査対象者	本町に居住している 20 歳以上の方(無作為抽出)
配布数	1,470 票
有効回収数 (率)	573 票 (39.0%)
調査方法	郵送
調査時期	平成 21 年 9 月 28 日 (月) ~ 10 月 16 日 (金)
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> ・フェイスシート (性別、年代、居住地域、職業など) ・町全体について感じていること、町の将来像 ・現行町勢振興計画に対する現状評価 ・次期町勢振興計画に対する重要施策 ・住民等と行政の協働 ・自由意見



提案された意見数は、「自助」429、「共助」383、「公助」426、合計1,238 という、多くの意見が寄せられた。

提案が多かった分野は、多い順に、「ごみ収集処理体制が充実し、減量化やリサイクルが進んでいる (7.0%)」「町には豊かな自然があり、水や空気がきれいである (6.7%)」「まち全体がごみもなくきれいである (4.9%)」「商店街が活性化している (4.4%)」「災害の備えや消防救急体制が整っている (4.0%)」「医療環境 (施設・機能) が充実している (3.9%)」「住民の防災意識が高い (3.8%)」「働く場がある (3.6%)」「スポーツ・レクリエーションが楽しめる環境が整っている (3.3%)」「介護などの高齢者福祉が充実している (2.8%)」「人々が集まり活動できる場所がある (2.8%)」「街並みや景観が美しい (2.7%)」「安心して子育てができる (2.6%)」「自分の夢を実現するために、生涯学び続ける環境が整っている (2.5%)」「新しい地場産業や特産品が生み出されている (2.5%)」(表 2 - 2 5 参照) などであった。

a. ごみ収集処理体制が充実し、減量化やリサイクルが進んでいる

表 2-26 「ごみ収集処理体制が充実し、減量化やリサイクルが進んでいる」の
主な提案意見

自分や家族の 取組み (自助)	家族で話し合い、きちんと分別する。着れなくなった服はリサイクルする
	分別時は水洗いして出すなど心がける
地域や団体等 の取組み (共助)	定期的にバザーや交換会を開催する
	お年寄りで、空き瓶等、重い場合声をかけ手伝う
行政の取組み (公助)	側溝の汚泥を肥料化したり、町による樹木の切り倒したもので炭を作り、販売できたら資源有効利用となる
	リサイクルの双葉町全体の量やリサイクルのゆくえ等、結果報告をする

b. 町には豊かな自然があり、水や空気がきれいである

表 2-27 「町には豊かな自然があり、水や空気がきれいである」の主な提案意見

自分や家族の 取組み (自助)	水質保全に努めるように、まず家庭内での水の使用について考える
	汚水を川に流さない
	前田川を憩いの場とする
地域や団体等 の取組み (共助)	きれいな海があるのだから、もっと外部へアピールする。夏だけではなく、もっと利用方法を考える
	前田川をほたるの飛ぶ川に。または泳げる川にするいくつかのグループを設置する。(企業毎、地区毎、有志グループ等)
	前田川を清掃する
行政の取組み (公助)	現状以上にきれいに保つために予算を確保する
	行政で活動プロジェクトチームを公募し(複数でも)、財政支援する
	前田川を禁漁区として、鯉などを多く放す

事例：福井県高浜町（心癒博）・・・行政主導から町民主体へ⇒知恵を出し合う場づくり



事例：福井県高浜町(心癒博)・・・まち歩き・田舎体験ガイドツアー、

心癒(いなか)の宿づくり



【認定基準】

- ① 町内の旅館及び民宿業の資格を有する宿
- ② 地産地消や郷土料理など地域の特色をいかした食事を提供できる宿
- ③ まち歩き・田舎体験と連携できる宿
- ④ 実行委員会の主催する講座を受講した宿



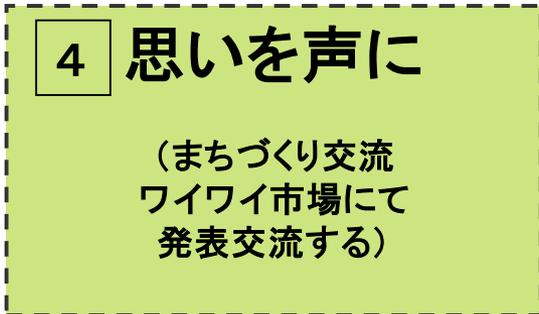
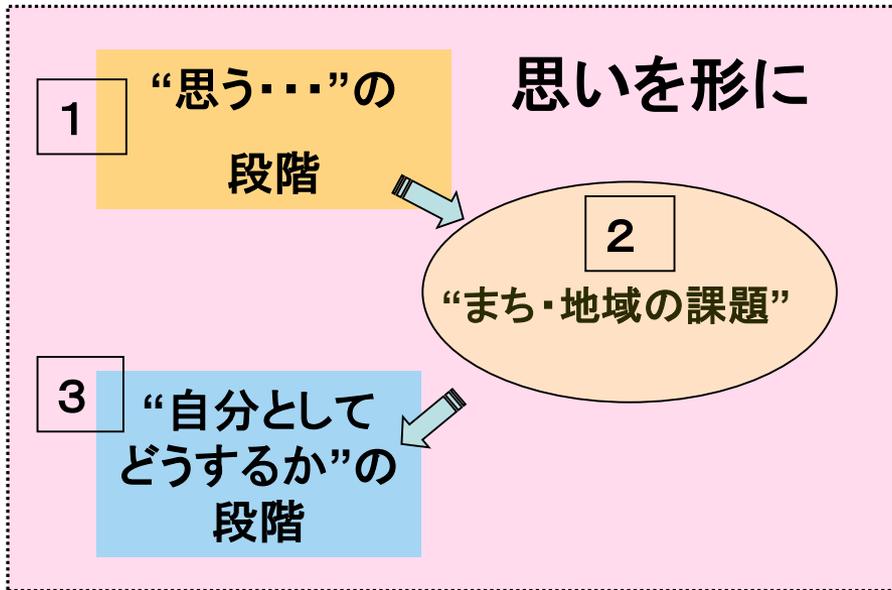
事例：福井県高浜町(心癒博)・・・ **生き生きとまちを案内するガイドの誕生**

心癒案内人

2月26日、27日、28日の3日間の高浜町案内人が誕生しました。
お礼にも感謝を承りました。お礼状と記念品を贈りました。



事例: 福井県高浜町(心癒博)・・・ 人材育成が重要⇒自分から出発⇒思いを形と声に



高浜町のまちづくり講座応用編の第1回＝12日夜、(10/11/18) 町役場

高浜活性化へ人材育成

町まちづくり講座・応用編 開講

観光・自然・文化 先進事例学ぶ

高浜町は十二日夜、住民や行政の担当者対象に「まちづくり講座・応用編」をスタートさせた。来年三月まで月一回、県内の先進地から講師を招くなど具体的な事例を参考にしながら、地域活性化に取り組みやすいテーマを養成する。講座の仕上げとしてミニイベントの開催にも挑戦する。

昨年十一月から今年三月にかけて計九回の基礎編を実施。約三十人が参加し、まちづくりのテーマ意識やプランのたて方など、理論を中心に座学で学んだ。終了後、受講者が活性化計画の企画書やアイデアシートを提出した。応用編の講座は全

六回、観光、自然、文化、ぜひ活用してほしい」と呼び掛けた。

今後は、十二月十七日に勝山市のエコトリウム推進団体「アム自然環境教育事務局」代表の坂本均さん、来年一月二

十一日に福井市栗山地区の年寄り劇団「パリス」代表の林幸男さんを招く。

いずれも午後七時半から町役場。

参加無料。基礎編を受講していない人も参加できる。申し込み、問い合わせは町企画情報課（電話）0770-7701、FAX 0770-7701。

同課では、この講座でまちづくりの中心的人材が育ち、交流する場になってほしいと期待している。

来年度は、さらに具体的な内容の「実践編」を予定している。

来年度は実践編

昨年十一月から今年三月にかけて計九回の基礎編を実施。約三十人が参加し、まちづくりのテーマ意識やプランのたて方など、理論を中心に座学で学んだ。終了後、受講者が活性化計画の企画書やアイデアシートを提出した。応用編の講座は全

高齢者等の活動事例

所在地	活動団体・グループ
大熊町	會空（あいくー；会津木綿のクマのぬいぐるみ製作） あつまっか大熊 （心と心のふれあいを大切にし何でも語り合える場づくり、イベント企画）
あぶくま地域	かーちゃんのカプロジェクト （女性農業者の知恵を生かす場をつくり、おふくろの味を提供販売）
富岡町・川内村	おだがいさまセンター （社協を中心にボランティア・各種団体グループの活動の場づくり）
郡山市	郡山水と緑の案内人の会 （歴史や文化財、自然などをテーマにした観光案内）
福島市	ボランティアグループ「よつば会」 （一人暮らし高齢者の食事会、買い物付き添いボランティアなど）
宮城県柴田町 宮城県七ヶ浜町	わくわく元気応援クラブ （ダンベル体操による介護予防サポーター） 友愛リーダー *ビデオ紹介
岩手県西磐井郡 岩手県矢巾町	移送ボランティアグループ（通院送迎サービスなど） グランマシニア教室 *ビデオ紹介

一方行政側も

町の全役場職員を対象とした調査結果は驚くべき結果

→ うつ病と判断された職員が21%

震災時から勤務を続ける職員25%、

自殺の危険がある職員が9%

通常はうつ病になった割合は1~2%

福島県立医科大学の
昨年10月のメンタルヘルス調査結果より

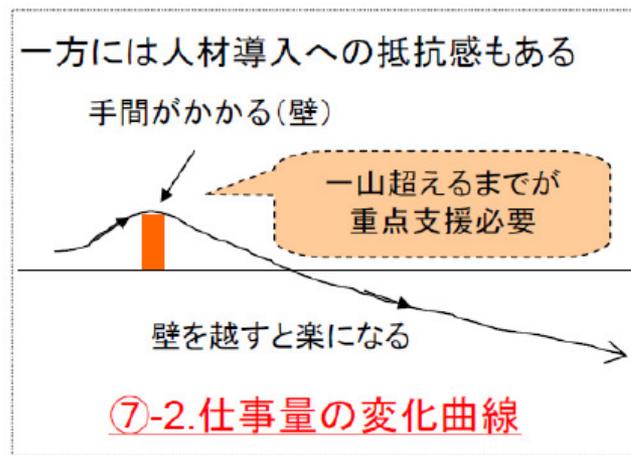
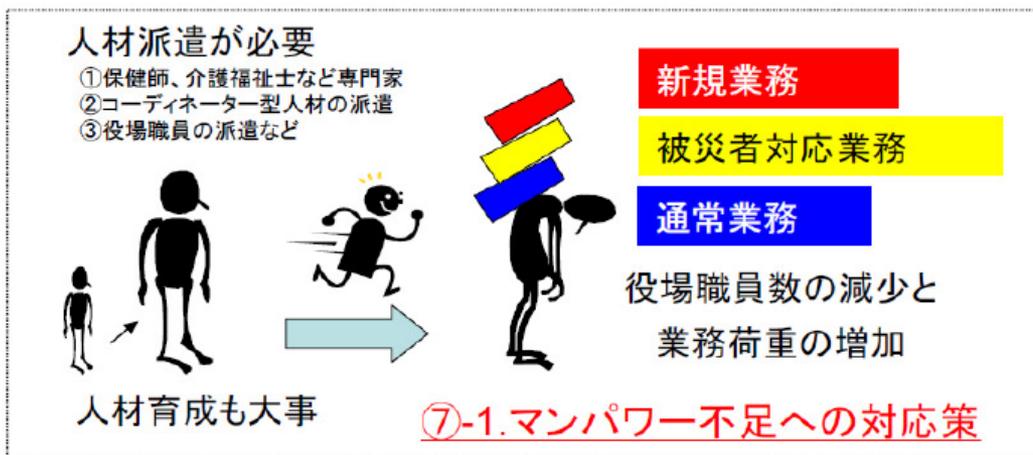
圧倒的にマンパワーが解消されない中で
起きていること

→「惨事ストレス」

「惨事ストレス」とは・・・

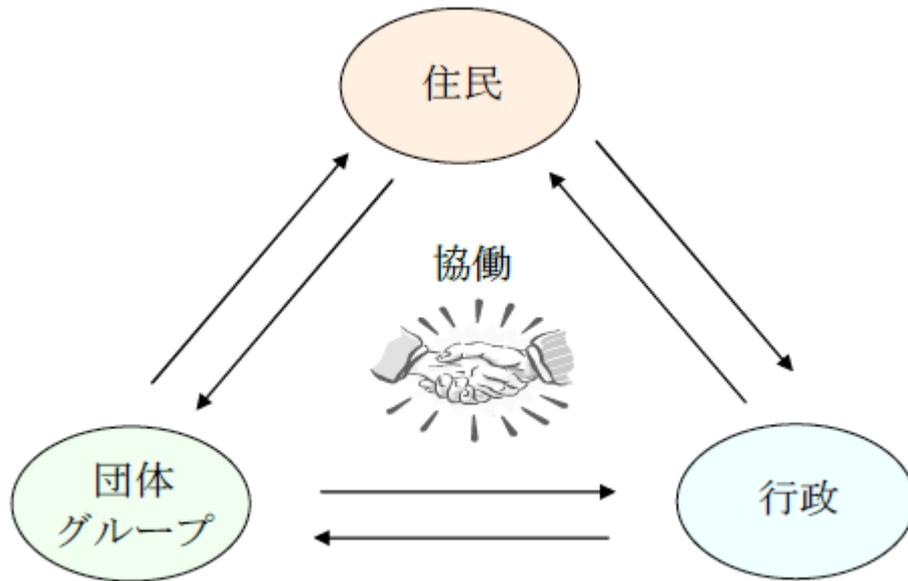
救援者としての自治体職員、看護師、保健師、ケアマネ、介護福祉士等の福祉施設職員など、専門的技術を持って、被災者の相談にのりながら心をケアし、被災者に寄り添って、解決に当たる人たちが、その活動の悲惨さ・解決方法の見えない状況が日々続く中で、極度のストレスを抱えて苦しむ、そして自殺やうつ病などの悲惨な目に自らがあってしまう

- マンパワーの確保として考えられるのは、以下の諸点
 - 1) 国・県・他自治体等からの派遣→数名は来ておられる
(3か月、6か月、1年以上など)
 - 2) 人材募集
(職員募集：保健師、ケアマネ、文化財関係の学芸員など)
 - 3) 人材派遣事業の活用 (総務省事業、復興庁事業など)
 - 4) コンサルタント等への外部委託
 - 5) 若手人材の育成
- 不足している理由は、3段重ねの業務量
通常業務 + 被災者対応業務 + 新規業務



大事なこと①

町民等と行政との“協働復興”



- 「協働」とは、住民、各種団体、企業、そして行政が、互いに対等な立場で連携・協力し合うことです。
- 「協働」の文字をよく見ると、「協」は、“力をプラスする”と書きます。また「働」は、“人が動く”と書きます。まとめていえば、“力をプラスするように人が動く”ということになります。
- 「住民の力」と「行政の力」をプラスするには、お互いに信頼感がなければなりません。そのためには、双方向のコミュニケーションがととても大切です。

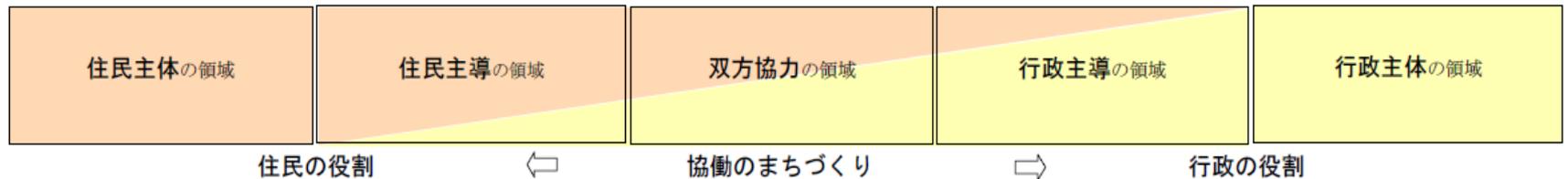
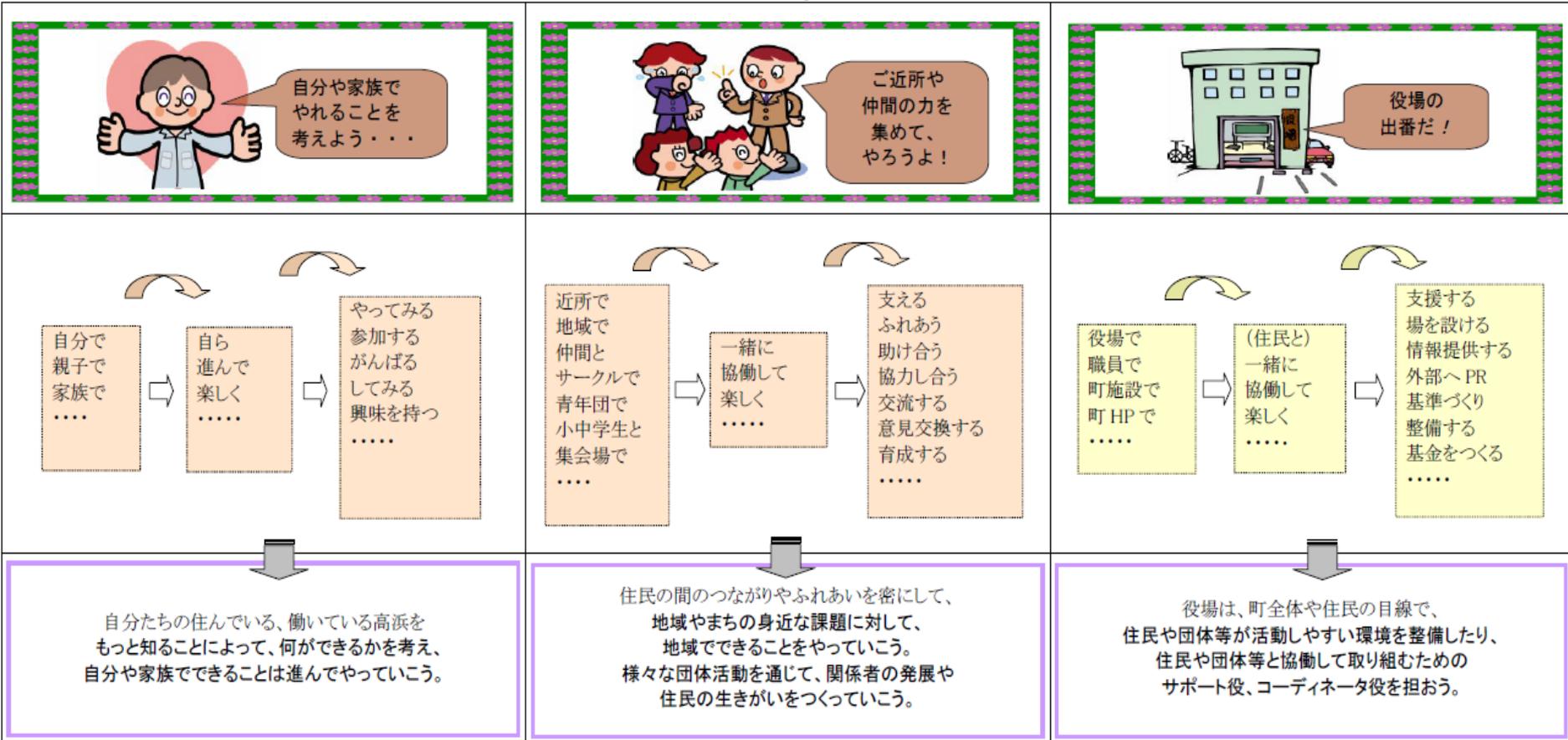
★協働する相手はさまざま

NPO、ボランティア、
全国の被災地支援グループ
専門家・学者
大学・学生
企業、公益財団などなど

★ポイントは？

互いをつなぎ動かすこと(人づくり)
それを持続できる仕組み(場づくり)

② 自助・共助・公助の精神



経験・知恵・技能がある高齢者だからこそ “自分たちでも、できることはあるはず”

- 第1のふるさと、第2のふるさと、いずれにしても“**わがふるさと**”
- 事例はあくまで“ヒント”、あとは“**自分たちの状況から考え工夫**”する
- 「3K」から“**新しい3K**”へ
(**苦しい、悲しい、国策の責任** → **工夫、語り合う、協働・協力**)
- 人が生きている以上、**災害や悲劇は突然**やってくる
- **役場にも限界**がある
- 「町民の自主性の発揮による活動が基本で、「**行政は黒子**」に徹する
- 「行政依存」から「**町民の自主性・主体性の発揮**」へ
- 一つ加えるとすれば、「**切り替える**」の“K”



世界的にも最も困難な町で、
“**立ち上がった**”町、“**立ち直った**”町として記憶